

第五章 阿頼耶識

一 心あらしむべき三つの原因 — 神経系統(根) 刺激(境) 注意活動(識) —

皆さんに見えている、この笹本の顔は皆さんのお心であると申し述べてまいりましたが、この心は原因なくしてはできません。何が原因となりましょうか、まず眼が原因となります。皆さんが眼を瞑りますと、見えている顔という心はなくなってしまうです。でありますから、この心あらしむべき原因として眼が必要であります。

眼と申ししましても、もちろん神経系統全体の意味であります。眼にはまずレンズがあり、水晶体の裏側の網膜には神経線維が来ています。それを手操ると脳髓の後部まで続いています。その終端は後頭葉視覚中枢の神経細胞であります。この神経系統を仏教では「根」と名付けております。もちろん皆様が私の顔を御覧

になる時には、一秒時間に四百五十兆回から七百五十兆回までのいずれかの振動が眼に入り、レンズで屈折して網膜の上に倒さの実像を結びます。そしてそこに来ている神経線維の末端に変化が起こって、その報告が後頭葉中枢にもたらされます。そうすると注意が喚び起こされて、ふと注意をする先の所にこの顔が見えます。見えている顔、これは皆様のお心であります、その心あらしむべき原因の一つは眼（神経系統）であります。この神経系統を「根」というと先程申しました。仏教では五根あると申します。

けれども神経系統だけでは物を見る事も、音を聞く事もできません。皆様が見ておりましたも、見ておりませんでも、私が死にません限り、皆様とお別れして家に帰ります筈があります。そういう筈がないとは言えません。皆さんは御自宅を離れて此処にいらつしゃいましたが、御自宅にも今何かがあるに相違ありません。それは何でありましょうか。また私共は此処に黒板を見ます。けれども此方の空な所を見ましても黒板は見えません。黒板は此処にあるのであつて、あちらの方に黒板は見えません。そういったしますと、ここには何かあるものがなくてはならないはずであります。物理的に申しませば、それは振動であると申します。また刺激とも申します。この刺激がなければ、私共神経系統だけでは物を見る事も、音を聞く事もできません。例えば眼があつても燈火を消しますと、見えているという心はなくなりません。その心あらしむるためには、光が皆さんの眼の中に入ることを必要とします。これを刺激と申します。刺激が行かなければ、見えている顔という心はできません。

見る場合には光の波動が刺激となりますが、聞く場合には音波が刺激となります。ある振動が空中に起こって、その振動が空気を伝わって耳の鼓膜を振動させます。そして三つの骨を伝わって内耳の中の蝸牛殻の

琴線に共鳴を起こして、そこに来ております神経の末端に変化が起こって、その報告が大脳皮質の顛顫葉中
枢（聴覚中枢）にもたらされ注意が喚起されて、その注意の働きかける先の所にハタと音を聞くのでありま
す。種々の刺激がある訳であります。但、これを「境」と名付けております。

また神経系統と刺激とだけでは物を見る事も、音を聞く事もできません。心は起こりません。見えている
心あらしむべき原因としては、注意するということが必要ならば心は起こりません。心が他に執とらわれておりま
すと、「見れども視えず、聞けども聴こえず」ということになります。皆様が笹本の顔を見ております時には、
この顔に注意が注がれており、もしも注意が他に注がれております時には、他のものが見えているはずであ
ります。今皆様はこの顔の所に注意をしておりますから、この顔が見えるのであります。

この注意するという働きを仏教では「識」と名付けております。識とは投象作用 (Projection) であります。

根——神経系統

境——刺 激

識——注意活動

幻燈機械における絵は向こうの白い布の上に投象されてできます。皆さんの神経系統は譬えて申します
と、ちょうど幻燈機械に相当いたします。幻燈機械は此処にあります。それによってできる絵は向こうの
布に投象されて写ります。皆さんが私の顔を御覧になります時、この顔はそちらの皆さんの眼の中や、頭の
中にはできません。此処にたった一つマザマザと覚っているだけで、この顔を離れて、そちらの方に覚つて
いるということはありません。かくのごとく注意の働きかける先方に見えている顔、聞こえている音という

心ができるのであります。

以上三つの原因が揃いますと、見えている顔、聞こえている音、味わわれている味わいという心ができません。この三つの原因であります根と、境と、識とを仏教で「阿頼耶識」と申します。

さて次に考えます問題は、この根と、境と、識とが何であるかということであります。

私共、今まで見た限り、聞いた限りにおいては、それはその時その時の心であったということをお一緒に考えまして、これはもう皆様御異存なく御了解下さったことと思えますが、今までに一切唯心と申しましたのは、見た限り、聞いた限りにおいては一切は唯心であると申したのであります。しかし、これからはその心の起こる原因であります根・境・識もやはり心だということをお話し申す訳であります。

まず根・境・識及びこの三つの原因によつて起こる心を譬喩をもつてお話し申しますと、例えばそれはマツチのごときものであります。マツチ箱の縁ゆみ、マツチ棒、酸素ガスがあつて、この三者が炎を出すために必要であります。マツチ棒をマツチ箱の縁の葉にシユツと摩りますと、空气中の酸素ガスを摂つて炎ができません。炎あらしむべき原因はこの三つの者であります。けれどもよく注意して頂きとうございます。炎はマツチ棒でも、酸素ガスでも、マツチ箱の縁の葉でもありません。しかもマツチ棒をマツチ箱の縁の葉に摩りますと、空气中の酸素ガスを摂り、化学変化が起こつて化合した結果できるものが炎であります。此処に見えております顔は心であります。この心は例えば炎であります。この心あらしむべき原因が根と、境と、識であります。それらは例えばマツチ箱の縁の葉、マツチ棒、空气中の酸素ガスであります。大変くどく申し上げましたが、くどく申し上げましたには理由があるからであります。

普通の考えによりますと、此処に見えている顔は物質であつて、それを見るのは心であり、頭の中の心が頭の中に物質を見るのだと誤解しているからであります。この顔を皆様の頭の中に起こるものの原因だと考へるならば間違ひであります。皆さんが私の方を向いて見ておられます時、皆さんに見えている私の顔は例へば炎であつて、すなわち皆様の心なのであります。皆さんに見えているこの顔は、三つの原因が和合してできたお心であります。

二 催眠術の実験例

さてこの根・境・識が心だということを申し上げる段となりましたが、この根・境・識は三昧中においてこれを知ることができません。阿頼耶識に就いては經文中にも三昧中の事実として取り扱つております。それでこの三昧というところに就きましては、先般来段々お話し申しましたが、この事に就きまして、もう少しお話しいたしておきたいと思ひます。

仏教では三昧ということをやかましく申します。この三昧には世間の三昧と出世間の三昧とあると申します。出世間の三昧は永遠の生命が得られた三昧であり、世間の三昧は永遠の生命が得られず有為転変を脱し得ぬ三昧であります。しかし催眠術に十分にかかった心は確かに三昧であります。もちろん三昧と申しましても、それは世間の三昧でありますけれど、催眠術に十分にかかった心は三昧であります。

私の恩師であります姉崎博士は宗教概論の講義をして下さいましたが、その節、種々と神秘的な話ばかりして下さいました。姉崎博士はロンドンに本部を置いております心靈研究会の会員をしておられまして、か

つ帰朝されたばかりでありましたので、いろいろ催眠状態における三昧の事に就いてお話し下さいました。心霊研究会 (The Society for Psychological Research) と申しますと、ロンドンに本部がありまして、ヨーロッパ、アメリカ等に会員が分布しております。当時日本では東京帝大の姉崎博士が唯一の会員でありました。一言お断りしておきますが、この会は「一人人間の靈魂は滅か不滅か、人間は果して生まれ変わり死に変わりするものかどうか」という問題の解決を得るためにたくさん有力な学者達によって起こされた会でありまして、道楽半分の研究会ではありません。その初代会長を勤めたのが有名な倫理学者ヘンリ・シジウィック (Henry Sidgwick 英 1838～1900) であります。その後歴代の会長には米國ハーバード大学の實驗心理学の教授で、ドイツのヴント (Wilhelm Max Wundt 英 1832～1920) と共に、世界心理学の二泰斗と敬われたウィリアム・ジェームズが会長であったこともあり、今でも哲学界で偉名を馳せているフランスのベルグソン (Henri Bergson 仏 1859～1941) が会長を勤めています。

このように、歴代の会長から見ましても真剣な研究会であることが伺われます。この会では会員達相互が事実あつた結果を報告し合つて研究を重ねた結果、遂に人は生まれ変わり死に変わりするものだということが、とうに明らかにされました。つまりその会の設立の目的はもはや達せられた訳であります。研究中種々な副産物が得られましたので、その副産物に就いてなお今日まで研究が続けられております。

そして仏教の神通力ということがまんざら駄法螺ではないということが分かりました。会報が段々発表されて、その会報の内から抜粋して出版された書物をお拾ひ読みしたことがあります。その中に天眼に関する事実がいろいろありました。天眼 (仏、英…clairvoyance, 英…Hellschen) の中の一例を申し上げます。

エジンバラ大学の教授グレゴリー氏がある友人を訪問いたしました。そこにちょうどある婦人が来合せておりました。この婦人はよく催眠術にかかつて遠方の事物をよく見ることのできる婦人でありました。グレゴリー氏は「これはよい折りに伺った。私の息子がグリノック——スコットランドの西岸にありまして、エジンバラから四、五十マイル離れております——に居るが、倅が今何をしているか見て頂けますまいか」と申しますと、婦人は承諾いたしました。友人がその婦人を催眠術にかけますと、十分に催眠状態に入りました。そしてしばらくの間探し求めているような様子でありましたが、やがて婦人は話し始めました。「貴方の息子さんが行っている家は街から離れた静かな小高い丘の草原の真中に立っている。息子さんは今犬と戯れている。すばらしい大きい犬だ。全体が黒く所々に白い斑があるニューファウンドランド種の犬だ」婦人がそのように言うのです。ナ。この婦人は犬の種が何種であるかということまで申します。その方面の知識が明るかったと見えます。

そしてまた続けます。「大変だ、今犬が息子さんに飛び付いた拍子に帽子を蹴落した。こちらに一人の紳士が居る。本を片手にして時々息子さんを見ている。この人は僧侶だ。英国教会の坊さんではない。プレスビテリアンの坊さんだ」その婦人の言葉は間違いありませんでした。その紳士は息子を托した先の紳士でありまして、人格高潔なプレスビテリアンの牧師でありました。婦人はさらに言い続けました。「息子さんが二階に上った。女中さんが台所で羊の片足を焙っている。息子さんがポテトを持って出た。息子さんは下に降りてまた犬と戯れている。紳士は玄関先にいる」グレゴリー氏はそれを筆記して先方へ問い合わせて見ました。

そういたしますと返事が来て、それは事実であることが分かりました。その返事を見ますと、「家は丘の上の草原の真中にある。飼犬はニューファウンドランド種で黒色に白の斑がある。犬が飛び付いた拍子に息子さんが帽子を落したのも事実である。私の家の台所は二階にある。息子さんか二階に上ったのも間違いない。ただ一つ、息子さんが持つて出たのはポテトではなくてサンドウィッチであつた。犬と戯れていた時に羊の片足はまだ焙つていた。これも間違いない」という返事でありました。催眠術にかかつた婦人は事実を見ていたと言わねばなりません。ポテトだけは違つておりましたが、それ以外は違つておりません。それは天眼であります。どなた様も催眠術にかかれれば天眼が開けます。天眼とは天の神々が持つている眼という意味で天眼と申します。私共も精神統一をいたしますと、天眼が働くようになります。

これは三味の眼でありまして、一種の精神作用であります。三味の眼でありますが、世間の三味を出まません。でありますから天眼では心靈界は分かりません。永遠の生命も分かりません。如来様も、お浄土も拝めません。しかし、肉眼とはだいい性質が違つております。天眼とはどんなものであるかは、上に申し上げた例で大体御想像下さる事と思ひます。それは天眼であると申し上げました。

催眠術にかけますにはどのようにするのかと申しますと、細い鉛筆の先へ鏡などを付けて、眼の近くで二三分間じつと見つめさせます。そういたしますと、眼が少しトロンとしてまいります。そうなりました所で、眼を瞑らせて傍で上から下へ撫で降ろしてやります。頭と首の動脈を押え圧迫しますと、段々脈が微かになり指の先に感じないようになりやすくと、もう催眠術にかかつている訳であります。そうなりやすくと、身体を指先で押しやりまして、もう倒れるようになっても抵抗しません。その時ちようど眠つたように見えます

が眠りとは違います。「手をお挙げなさい」と言えば手を挙げます。「身体を真直ぐにしなさい」と言えば真直ぐにします。普通の眠りならば傍で言った事は聞こえないはずであります。このような状態になったことを催眠状態と申します。こうなりますともう千里眼、透視などという働きが自由にできます。大学で私共に心理学を講義して下さった方は文学博士元良勇次郎先生もとらであります。先生がある学生を催眠術にかけたところ大変よくかかったとのことでありました。「手拭いを八重に畳んで目隠して名刺の字を読ませたところが、間違ひなく読んだ」と、私共にお話し下さいました。その際この肉眼が働くはずはありません。しかし、心が三昧となりますと、三昧の眼をもつて名刺の字をも読む事ができます。

経文を拜見いたしますと、天眼の事が屢々書いてあります。六神通なるものがありますが、その六神通の中に天眼があります。善導大師は六神通を得て衆生を濟度したいと願われたと伝えられておりますが、もしも天眼が間違ひたいい加減のものでありますならば、善導大師はとんでもない事を願われたと言わねばなりません。

私も学校を出た当時、催眠術に大変興味をもちました。それは姉崎博士が催眠術に関する神秘的な事実を講義されたのが動機でありまして、卒業後も二年間ばかり実験を試みました。遠方の事実を見るとか、目隠して物を見させるとか、よくやって見ました。そして確かに催眠術にかかった状態、すなわち催眠状態は『法苑珠林』等において明示せられている通りの三昧の条件を具えていることを確かめました。催眠状態においては事実を如実に見るものだという事を知ることができました。この事に就いては私、断言することはばかりません。私もいろいろとやってみまして、西洋人の言っていることは本当に嘘でないと思ひました。

この催眠術にかかるといふこと、ちよつと催眠術といふことを聞いただけでも御列席の皆様の中には嫌にお感じになる方もあるかも知れません。

アノ、浅草の奥山の辺に参りますとよくやつております。催眠術にかかりやすそうな一人の大男を催眠術にかかけまして、別の小さな男を呼び出し、その大男に向かつて、とてもこの人を向こうへ押す事はできないと暗示を与えますと、その催眠術にかかつております大男は、ウンウン言つて汗をかいて押ししてもその小男を動かす事できないなどという事をやつて、これが催眠術だと言つております。また椅子を二脚持つて来て、その間に催眠術にかかつて男を横にして橋掛けにして、その上に二、三人乗せてもその橋が曲がらないといったような事をやつております。こんな下らないものを見て催眠術だと思つておりますから、催眠術など下らないものだと思うのであります。しかし、この事を段々研究してみますと、なかなか馬鹿にならない。第一に人が催眠術にかかつて、十分に深く催眠状態に入りますと、確かにその時の心は三昧であります。その眼は天眼であります。事実を如実に見得る働きをもつております。普通の考えによりますと、物を見る力は眼しかなないと考えますが、実在を見る眼には三昧の眼があります。以上述べましたように、三昧心と名付くる精神作用があつて種々の実験ができますが、この事実をよく考えてみますと、根や境が心であるということが論証されてまいります。識が心であるといふことは御異存ないことと思ひます。

なお、もう一つ催眠術に就いてお話し申しておきたいと思ひます。よく催眠術でどんな病氣でも治すと言つてゐる人がありますが、どんな病氣でもみな悉く治るといふのは嘘であります。けれどもまんざら治らないこともありません。私は催眠術で病氣を治すのは大嫌いでありますが、よんどころなく二、三回試みた事

があります。

かつて私の兄弟子に当る鎌倉の大仏殿の住職が、神奈川の私の所にやって参りまして申しますのに「家内の兄が腸チフスで入院したところ、猛烈な頭痛に悩み抜いている。催眠術を試みたらその頭痛が治らぬものだろうか」と言います。私は「催眠術で病気を治すのは大嫌いだから御免被る」と断りますと、「そんな事を言わないで試して下さい。とにかく頭痛のために安眠できずに困っているのだから」と申します。そこで私も行く気になり、翌日夕方参る事を約束いたしました。しかし、私も種々用事がありまして向こうに参ります時間がだいぶ遅れましたので、病人は私の参るのを待ちこがれておりました。しかし、この待ちこがれていたというのがよかったです。さつそく病人に催眠術をかけますと大変よくなりました。それで二十分ばかり頭を撫でながら「なるほど猛烈な頭痛がしますね。少しさするうちに頭痛が治ります。またその原因もなくなくなります」と繰り返しい言いかせて、催眠術を解きますと、一週間も猛烈に苦しんだ頭痛がケロリと治っております。私も少しばかり愉快でした。

その翌日の夕方もう再び見舞いに参りますと「昨夜、久しぶりで安眠ができて有難かった。今日も一日中業であった。夕方にまた少し頭痛が始まったが、しかし、それは以前の痛さと比べたら比較にならない」と申します。そこで、再び催眠術を施し、「少し頭痛がしますね。しかし、さするうちに治って来ます」と二十分ばかり言い聞かせ、催眠術を解きますとケロリと治っております。その後七十日ばかりの間、入院中に一度も頭痛がしなかったということです。私が「なるほど猛烈な頭痛がしますね。少しさすっているうちに治ります」と言いますと、その通りに思い込む。思い込んだ通りに頭痛が治り、催眠術を解いて後も頭痛を感じ

じない。このように催眠術によりますと、言われた通りに本人が思い込む。思い込んだ通りに事実がなつて来ます。「こいつはすこぶる眉唾ものだ」とお思いの方もありません。けれども私は事実をありのまま申し上げたに過ぎません。

以上、催眠術の実例を述べてまいりましたが、何故かくのごとき事が有り得るのでありましょうか。私は事実をそのままに申し述べたのであります。このような催眠術の実験上の事実はたくさんあるのであります。これらの事実をよく考えてみますと、根や境も、やはり心であるということが論証せられてまいります。これだけの前置きをしておきまして、それでこれから「根・境・識とは何ぞ」ということに就いてお話を進めたいと思います。

三 根・境・識

そういたしますと、神経系統は何かということに就きましてお話し申し上げます。

東京の精神病院の院長をしておられました精神病学の大家に呉秀三先生と申し上げる方があります。私共は在学中、医学部や精神病院へも行って先生の講義を聞いた訳であります。先生の博士論文に次のような事実が書いてあります。

ある青年を催眠術にかけまして「君の左脳の左半球は麻痺してしまつた」と暗示を与えましたところ、その青年の右半身が大体において——すなわち細かい事は別として——運動知覚を失つてしまいました。すなわち右手を挙げようとしても挙げられません。右半身を抓めつても痛くありません。それと同時にものを言



大澤謙二先生

う事ができなくなつたといふことであります。大脳の左半球は右半身の運動知覚を支配します。またもの言う運動を司る、いわゆるブローカー中枢（言語中枢）は大脳の左半球にあるからであります。そして、「この事は予期しない儲けものであつた」と付け加えて述べてあります。次に青年に「君の大脳の左半球の麻痺は解けた。今度は右半球が麻痺してしまつた」と暗示を与えますと、左半身の運動知覚は大体において失いましたが、しかし、今度はものを言うには差し支えなかつたといふ事が書いてありましたが、これは実にうれしい報告であります。

もしも大脳皮質と心とが別でありましたならば、心で大脳の左半球が麻痺してしまつたと思ひましても、心と別でありますならば、心で思つても身体の右半身が運動不可能になる訳はありません。心と大脳皮質とは別でありません。一つのものであります。でありますから心でそう思ひ込みますと、大脳皮質の上の事実となつて現れるのであります。でありますから大脳皮質は心以外のものとは考えられません。三昧中に心で思う通りに麻痺するのでありますから、大脳皮質は三昧中の心であると言わねばなりません。

大脳と精神との関係を研究いたします学問を精神物理学と申します。私は大学で心理学を専攻いたしました。当時心理学の学生は生理学も必修科目になつておりまして、大澤謙之博士が生理学を担当されておられました。生理学の中の一部分であります精神物理学を講義されました。それで私達心理学の学生も医学部の学生達と一緒に大澤謙之先生の講義を承りました。すなわち神経系統と精神との関係を解き明かされました場合に、催眠術の実験結果を私共にお話し下さいました。ある時、外国のある報告にあつたから、それによつて実験してみたが事実できたと言つて、私共に次の実例をお話し下さいました。

ある学生Aを催眠術にかけまして、その前に別の学生Bを立たせました。そうして学生Aに対して「君の前に学生Bが居るが見えるか」と言いますと、学生Aは「見える」と申します。そして学生Aに「お前の前に立っている学生Bは他の所に行つてしまつた」と暗示を与えました。そういったしますと、催眠状態にありますAは事実上自分の前の学生Bが他の所に行くのを見たのであります。学生Bが学生Aに話をしかけても、学生Aには聞こえません。「Bはもう居ない」と申します。やがて学生Aは催眠状態から解かれて平生の状態に帰りましたが、学生BがやはりAの前に立っているにもかかわらず、催眠状態の時、前に立っている学生Bが他の所に行つてしまつたと暗示を受けました学生Aは、催眠状態を解かれて後も、やはり現に前に立っている他の学生には見えているBを見る事できません。前に立っております学生Bが帽子をかぶりますと、Aは帽子が宙に浮いていると言つて驚いています。またBがAの持つているものを取りますと、Aは「何か恐ろしい力が自分の持つているものを取つた」と言つて驚いております。心理学の教室はずつと段々になつて周囲にずつと席があります。そこでこの様子を見ております大勢の学生がキャツキャツと言つて笑つております。Aも一緒になつて笑つております。けれども、その笑つております意味は違ふんですナ。周囲で大勢が笑つておりますのは、Aの前にBが居るのにそれが見えないので、それがおかしくて笑つているのであります。けれども学生Aが笑つておりますのは周囲の学生が皆笑つておりますから、共鳴して笑つているのであります。

それからちよつと申しておきとうございますが、この事は福来友吉先生が実験例としてお述べになつた事でありますが、この場合、前に立っております学生Bがステッキを後に回して持ちますと、学生Aはそのス

テッキを見る事ができるんですナ。Bの身体があつて後にステッキがあるんでありますが、Bが居る事は少しも邪魔にならないのであります。それで根・境・識が揃えば心が起るのであります。学生Aはまず「君の前に学生Bが居るが見えるか」と言われた時にBが見えました。しかるに「Bはもう他の所に行つてしまつた」と言い聞かせますと、そう思い込み、その通りBは居なくなつてしまいました。催眠術より解いて後も、今現在自分の前に立つてゐる学生Bが見えないのであります。でありますから、今この場合見えてゐる学生Bという心あらしむべき原因であります根・境・識のうち、どれかが欠けてゐると言わねばなりません。皆様は何とお考えになりましょうか。

眼に故障ができたとか、神経系統に故障ができたのでありますならば、周囲の学生を見る事できないはずであります。しかし、学生Aはその時、周囲の大勢の学生は見る事ができるのでありますから、根に異常があるとは言えません。この場合、周囲のいろいろの物を見るには差し障りないのでありますから、根に故障があるのではないこと明らかであります。識にも異常がある訳ありません。識は注意するという一種の精神活動であります。なんですナ、心にはきつと方向があります。音がします時、きつとその音のする方に向きます。注意がそちらに向くのであります。注意するという事がなければ、見たり聞いたりする事できません。でありますから、もしも識に故障があるのでありますならば、他の学生を見る事できないはずであります。けれども他の学生は見る事できるのでありますから、識にも異常はないと言わねばなりません。そういったしますと、境に異常があると言わねばなりません。境が欠けたために前におります学生が見えないのだと言わねばなりません。

そこで、話を前に戻しまして学生Aが催眠術にかかり催眠状態（三昧心）にある時、前に見えていた学生Bはその時の心、すなわち三昧中の観念に違いありません。しかるに「前に立っている学生Bは他の室に行ってしまった」と暗示を受けました時に学生Aは、自分の前に立っている学生Bが他の室に行くのをマザマザと見たのであります。すなわち学生Bなる観念が前に居なくなったのを三昧中に見届けました。その自分の前から居なくなった学生Bなる観念、すなわち、その他の室に行ったものは何でありましょうか。自分の前から学生Bが他の室に行ってしまった後、催眠術から解かれましてもやはり学生Bという心はできなくなりました。でありますから催眠術にかかった時見えていた学生B、すなわち別室に行ってしまった学生Bは三昧中の観念であります。それが目覚めて後に見えている学生Bという心の原因の一つである境であると言わねばなりません。故に「境とは何ぞ」すなわち三昧中の観念であるということになります。

でありますから、皆さんがこちらを向いて御覧になる時、此处に見えている顔という心がありますが、その刺激は三昧中の心だ、と言わねばなりません。なぜかという、催眠術にかかり、すなわち心が三昧になって、なくなつたと思ひ込むと、その通り算めてから後も、その刺激はなくなつてしまうからであります。見えている学生Bという心は起こらなくなりました。しかし、その場合に神経系統も注意活動も異常はないと前に述べました。でありますから刺激（境）は三昧中の心と言わねばなりません。境は一種の心にほかなりません。

けれども何ですナ。学生Aが前へ歩いて行きますと、やはりBに突き当たれば躓くんですナ。そういったしますと、やはり境がそこにあるのであって、向こうに行ってしまったと見えたのは嘘であつたとお思ひにな

るでありましょうか。これは何ですナ、境と一口に申しまして色と、触と、音というように全々別物であります。もちろん刺激でも空気の振動、エーテルの波動、物理的なもの、化学的なものというように違いますが、振動でありまして、振動数がみな各々別であります。

いつも申しますように、音は八回乃至十六回から五万回までの振動がある時、音を感じます。蠅がブーンと発する羽ばたきの音のする所には四百何十回かの振動があります。色彩の世界には一秒時間に四百五十兆回から、同じく一秒時間に七百五十兆回の間のいずれかの振動の存する所に、我々は一定の色を感じる。また物理学上紫という色がある所には必ず七百五十兆回の振動があるというように、また赤と認められる色の存する所には必ず四百五十兆回の振動があるというように、紫と赤とは全くその振動数が違い、音と色とはまた全くその振動数が違います。そのように境は色、音、香、触等各々別のものであります。

あなたが私（笹本上人）を御覧になります時、私は色、形であります。私をガリガリ噛んだといたしますと、さぞまずい事でありましょうが、何かそこに味があります。また私に触ればスベスベザラザラを感じます。また押せば抵抗をお感じになります。けれども色、味、スベスベザラザラ、抵抗というように皆境は別であります。色というところでありますと、催眠術位でも暗示を与えて、「もう君の前にはBは居ない」と言いますと、本当に居なくなってしまう。けれども、抵抗はなかなかなくなりません。

それで私はある時弁栄聖者にお尋ねいたしました。「触の方は催眠術によって実験いたしました。どうもできません。ですからどうも一切唯心とは言えないように思われます」と申しますと、弁栄聖者はおっしゃって下さいました。「明の国——今の支那でありますナ——の智旭ちきよくという方がお著しになりました書物にこ

ういう事が書いてある」と言ってお教え下さいました。「ある人が三昧の心で室の中でふし穴をじつと見つめているうちに、ヒヨコツと外に抜け出てしまったと書いてある。深い三昧に入ると触も取り除くことができる」とお教え下さいました。もつともこの深い三昧というのは色、声、香、味を取り除くことのできる三昧に比べて深い、という意味の「深い」であります。智旭程の人がそう書いていますから、いい加減なことを言っておるんではありません。信ずる事ができます。

いつもお話をいたしております事ですが、私のこの手に今力があるとお考えになりましようか。誰か来て私の手を上に挙げようとすれば上に挙げられます。此方へやろうとすれば、その通りになります。この時私の手に力があるとは言えません。けれども、もしも私がやらせまいと思えば、挙げようと他から引つ張つても挙げさせません。此方へやろうとしてもやらせません。それは私のやらせまいと思う心、意志が働いているからであります。外からは、それが抵抗と感じますけれども、内面から見ますと、それは意志であります。Aが願いたのは意志であります。意志は色も形もないもの、抵抗であります。でありますから、やはり一切は唯心と言わねばなりません。

カント (Immanuel Kant 1724~1804) も物がそこに見える時、何かそこになくはないと思っておりますが、それが何であるか分かりませんでした。此方の空な所を見ても黒板は見えません。やはり黒板は此処にあるのであります。でありますから物が前に見える時、何かそこに物が見える原因となるべきもの、刺激がなくてはならないと思っていました。私共が経験する感覚の源泉となるものをカントは Ding an sich (ディング・アン・ジツヒ)「物それ自体」と名付けました。仏教より見ますと阿頼耶識であります。

カントは三昧という事実を知りませんでしたから、何かなくてはならないと思っておりましたが、それが何であるか分かりませんでした。その後になりました、私経文を拝見いたしました、やはりその所は三昧中の事実として取り扱ってあります。そういたしますと只今の所、御会得이었습니다でしょうか。

〔質問〕 現在学生Bが居るからには境があるのではありませんか？

〔上人〕 私共は普通境は唯一のものだと考えますが、仏教では境は人々別々のものだと思います。故に一人に見えなくても他人には見えております。

今度はその逆もあるのであります。東京帝大の教授をしておられました大澤博士御自身が人を催眠術にかけて実験なさった事でありますが、ある看護婦を催眠術にかけ、寝台の上に横たわらせて、胸の乳首の上を少しはだけて鉛筆を当てて、「これは焼火箸だから火傷するぞ」と言いました。そして鉛筆を離して見ていると、みるみるうちに充血して来て真正正銘の火傷ができたという事であります。鉛筆を火にくべて当てたというのではありません。けれども火傷は医学博士が見て真正正銘の火傷だというのでありますから確かであります。不思議ですね。しかるに当てたのは触れても火傷しないという意味において冷たい鉛筆でありました。でありますから鉛筆のために火傷したとは考えられません。

「焼火箸だぞ」と言われるままに焼火箸という心ができます。「火傷するぞ」と言われるままに火傷という心が浮かびます。

例えば「日光の陽明門」と言われると、その記憶が浮かびます。心は三昧でありますから、三昧中に焼火箸という心、火傷という心が言われるままにできます。それは三昧中の観念であります。そうすると事実上

肉体に火腫ひぶくれが生じてまいりました。でありますから三昧中の心は実物と同じ意味を持っております。焼火箸という三昧中の心は事実上焼火箸であります。火傷をするという三昧中の心は事実火傷であります。火腫ができたのでありますから、そう考えるほかありません。

前に述べました学生AとBの例は、刺激は三昧中の観念であることを物語るに反し、逆にこの例は三昧中の観念は実物の刺激と同じ意味をもっていることを証明します。故に境は三昧中の心だと言わねばなりません。境は一種の心であります。同様の種類の事実がたくさんありますが、こういう事もあります。高等女学校の校長先生をしておられますある方が、酒好きの人を催眠術にかけて、コップに水を入れて持つて来て「君、これは良い酒だから飲みたまえ」と申しますと、その人が「有難う」と言つて、その水を飲みました。するとやがて顔が赤くなつてまいりました。脈を測つて見ますと、アルコールを用いたのでなくては現れない現象が現れております。酒と思つて飲んだから、何だか酔つたようないい気持になつたと言いますようなものでありません。大いに客観的であります。三昧中にアルコールの観念ができて、それが青年を酩酊せしめたのであります。そのように三昧中にそう信ずる時は、境は事実そのものとなつてしまふのであります。

関東地方では今時分大施餓鬼という事をいたします。その時きつと読みます偈文でありますが、
若人欲了知三世一切仏心造法界性一切唯心造。

というのがあります。この偈文の意味を申しますと「もし人が三世一切の仏を知りたいと欲するならば、まさに法界一切のものは皆心が造るものである」ということを知るがよい」ということであります。一切は心であります。これはほんの小部分的な所でありますが、この極端なものは真言宗の毘盧遮那経中の六大無礙の

哲学であります。実に大哲学であります。

真言宗に参りますと三七体の本尊様を安置申して、その前に座ると直ちにその本尊様となつてしまうように修行を励みます。法然上人の『逆修説法』の中に「大安寺の勝行上人は五輪觀の成就した人である」とおっしゃつております。「五輪」と申しますのは地・水・火・風・空のことです。法然上人程の御人格を持つておられる方がそうおっしゃるのでありますから信ずることができません。

ある日、勝行上人が道場に入つてあまりに出て来るのが遅いものですから、お弟子の一人がそつと様子を眼に参りました。障子に穴を開けて中を覗いて見ますと、上人がおおいでになりませんで、ただ透き通つた水があります。「どうも変な所に水があればあるものだ。本当の水か知らん」と思いまして、お弟子さん石を持つて来まして投げてみました。するとチャポンと音がして、その石が下に沈んでいるのが見えます。「これは本当の水だな」と思いましたが、「どうも変な所に水があればあるものだ」と不思議に思つておりました。やがて上人が道場から出て来られました。「どうも胸が痛くて仕方がない。お前達何かしやしなかつたか」と申されました。そういたしますと、さつきのお弟子さんが「実は上人様が出ておいでになるのが遅いものですから、どうしたのかと思つて覗いて見ますと、上人様がおいでにならずに、ただ水がありました。それで変な所に水があればあるものだと思ひまして、本当の水かどうか試してみようと思ひまして、石を投げ込んでみましたら音がして底に石が沈んでいるのが見えました」と申しました。それで上人様は「アア、それで分かつた。どうも胸が痛んで仕方がない。明日一つその石を取出してくれ」と言われました。

それで明くる日は、今度は大つびらで道場に入つて見ますと、今度は水ではなく、ポツポツと火焰が燃え

盛っております。傍に寄りますと熱いそうであります。それで棒を持って来まして、火を掻き分けて石を取り出しました。そういたしますと、やがて上人が出て来られまして、「アアこれで楽になった」と言われました。また勝行上人は一本の馥郁たる蓮の花となる事もできたということでもあります。

また覚鏝上人（興教大師）が未だ小僧であります時に、水汲みや、風呂炊きや、庭掃除などさせられておりました。真言宗には新義派と古義派とがありまして、その新義派の開祖が覚鏝上人であります。覚鏝上人は前世によほど修行ができておられたと見えまして、ある時風呂を炊きながら不動三昧に入ってしまったおりました。かわいなお不動様が片手に剣を持ち、片手に綱をもつて、火焰のポツポツと燃え盛る中に端座しておりました。ちょうどその時、そこを通りかかった御住職が「小僧やつちよるな」と、その有様を見て驚いたという事であります。このように真言宗では三昧をもつて、この身がそのものとなってしまうように修行するのであります。でありますから、もしも触覚に感じられるものも、その境が三昧中には心の通りになるというのでなければ、真言宗は成り立たないのであります。真言宗では即身成仏ということを申しております。これにすなわち理具成仏・加持成仏・顕得成仏の三種を立てます。

理具成仏と申しますと、理の上からいうのでありまして、仏たるべき質を具えている、たとえ未だ仏と言われるような完全なものとなっておらなくても、例えば卵のような状態であっても、仏の卵である以上、やはり仏ということができるといふ意味をもって、理具成仏と申します。理の上から言つて仏であるというのであります。

次に加持成仏と申しますと、修行しております時、ある一定の時間だけ仏となり切っておりますけれども、

三昧を解けば元の身となるという状態にある間を申します。でありますから加持の成仏であります。

次に顕得成仏と申しますと、加持の成仏の修行が段々円熟してまいりまして、行を加えた時だけというような状態でなく、もういつも三昧定中の人となり、もう永遠に仏と成り切った状態を申します。

このように、その修行の程度には種々ありますけれども、真言宗ではこの身体がそのまま仏となってしまうように修行をいたします。弘法大師は修行を終えて日本に帰って参りました時に、天皇様にその修行の結果を報告するために宮中に参内しまして、即身成仏ということをお説きになりました。弘法大師は勅命によって支那に修行に参ったのでありますから、修行成就して帰朝いたしますと、さっそく宮中に参内してその修行の結果を御報告申し上げた訳であります。そして、この身がそのまま仏となることができるかどうかやってみせよ」ということになりました。そこで弘法大師は直ちに大日如来の三昧にお入りになりました。そう見せよ」と、もう弘法大師はおいでにならないで、大日如来様だけがおいでになります。そうして光明赫灼として清涼殿を照らしました。その有様を目のあたり拝されまして畏れ多いことではありますが、天皇様には即座に弘法大師に御帰依遊ばされたという事であります。これは加持成仏であります。三昧に入っております時は大日如来でありますが、三昧を解けばまた元の弘法大師であります。こういう間を加持成仏と申します。このように真言宗ではこの身がそのまま仏となってしまうように修行をいたします。

ある書物の中に「素戔嗚尊すさのおのむねが敵に追い詰められました時に、ふと一本の葦になつて立っておられました。そこに敵が追っかけて来ましたが、葦が一本生えているだけでありますから、気が付かずに行き過

ぎてしまった」と書いてあります。こういう事を申しますと、「そんな馬鹿な事があるものか」と、申されるかも知れません。けれども、神様と崇められている方でありますから、私はそういう事は有り得べき事であると信じております。そのように切羽詰った時には、そのような力を現し得る三昧の力を持つておられたと信じられます。私には修行未熟でありますからこういう事はできませんが、事実できると確信はしています。それは何故そのような事ができるかが分かっているからであります。さあいかがでありましょうか。眉唾ものでありますかな。この理を明かしてありますのが真言宗の六大無礙の哲学であります。

識が心であるということは、どなたも御異存ないことと思えます。そういたしますと根も、境も、識も一切自己三昧中の観念であるということになります。一切は自己の心であるということになります。